

マタイによる福音書10章「イエスに遣わされる」

1A 十二人の指名 1-4

2A 宣教の性質 5-15

1B 先駆者 5-8

2B 全権大使 7-17

3A 迫害 16-39

1B 人々への用心 16-23

2B 人々への恐れ 24-33

3B 仲間との確執 34-39

4A 受け入れる者への報い 40-42

本文

マタイによる福音書 10 章を開いてください。私たちが、前回学んだように話は 9 章 35 節からの続きになっています。イエス様が、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝えました。そしてあらゆる病気や煩いを癒されました。そして、群衆が羊飼いのいない羊のように、弱り果てて倒れているのを感じました。断腸の思いと訳してもよさそうな憐れみに、イエス様は動かされました。それで、「祈りなさい」と言われました。そうした苦しみの中にいる人々に、「彼らの苦しみが無くなるように祈りなさい」とは言われませんでした。「収穫が多いが、働き手は少ない。だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。(9:38)」と言われました。主はご自分だけで働かれるだけでなく、ご自分の働きに関わる者たちが与えられるよう祈りなさいと言われたのです。

私たちが、今の社会的な現状、自分の周りの人々を見れば、幸せそうに見えて実はとても痛んでいる人々がとても多いです。いろいろな意味での痛みです。そして、私たちは自分自身もその痛みの中において、けれどもイエス様が癒しの御手を置いてくださり、霊において、また魂や肉体のおいても癒されます。しかし、イエス様は私たちがその癒しの受け手だけではなく、私たちを用いて、その働きの中に入ってほしいと願われているのです。ここでイエス様が祈りなさい、と言われました。まず、自身が祈ります。

1A 十二人の指名 1-4

しかし、自分たちがその羊であり、なぜ羊飼いでられるイエス様のような働きができるのでしょうか？それ自体が無理難題であります。今まで患者であったものが、どうやって医者になることができるのでしょうか？そこで、私たちはイエス様が行なわれることを学んでいきます。自分自身がイエス様の働きを受ける必要があるのに、どうしてその働きに加わることができるのか？ということです。

1 イエスは十二弟子を呼んで、汚れた霊どもを制する権威をお授けになった。霊どもを追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やすためであった。

イエス様は、働き人のために祈りなさいと言われて、ご自身も父なる神に祈られました(ルカ6:12)。そして、数ある弟子たちのうち十二人を選びました。これは、イスラエルの民にとっては大きな意味を持つ数字です。自分たちが十二部族だからです。神は、十二部族をもってイスラエルの民を神の家とされました。同じように、ご自分の家を治めるのに十二の弟子を選びました。

そして、「汚れた霊どもを制する権威をお授けになった」と言われます。ここですね、権威をお授けになったのです。イエスご自身が、汚れた霊どもを制する権威を持っておられました。それを弟子たちにも授けられたのです。権威が、自分にはなくキリストのものだということです。それはちょうど、大型トラックに対して停止するように、制している婦人警官のようなものでしょう。なぜ、大型トラックが婦人警官の言うことに聞き従うのでしょうか？彼女の制服ですね。その制服は、大型トラックの運転手が交通法で違反したら、牢獄に入れることのできる国の権威と力を持っていることを示しています。したがって、二つのことが成り立ちます。一つは謙虚さです。自分は何でもない人間なんだということを、素直に認めることができます。次に大胆さです。なぜなら、キリストには大きな権威が与えられているからです。小さき者に大きなことができるのは、小さき者に大きな権威を与えているキリストがおられるからです。

そしてその権威とは、汚れた霊どもを制する権威です。病気や煩いを癒すということもそうですが、その背後にいる汚れた霊どもを制する権威であります。つまり、今、警官の例を出しましたが、イエス様が与えられた権威も、悪に対して対峙するための権威であることが分かるでしょう。あとで、天の御国が近づいたと宣べ伝えなさいと命じられますが、御国が闇の世界に突入しているというのが、この働きの特徴です。

2 十二使徒の名は次のとおりである。まず、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、3 ピリポとバルトロマイ、トマスと取税人マタイ、アルパヨの子ヤコブとタダイ、4 熱心党のシモンと、イエスを裏切ったイスカリオテのユダである。

ここでマタイは初めて、「使徒」という言葉を使いました。この十二使徒が、教会を治める指導者となってきて、彼らの教えることが新約聖書として記録されています。この使徒の意味は、「遣わされる」という意味です。使命を帯びて、どこかに送られることです。派遣されることです。これまで私たちは二つの種類の人々を見ました。イエス様についていく群衆です。けれども、イエスの弟子となることに決め、そばにいて、共に時間を過ごし、ラビから教えを聞いて、それを聞いて守っていくという弟子たちがいます。群衆がいて、そして弟子たちがいます。

しかし今、使徒が出てきました。彼らは弟子でもあるのですが、すなわちイエス様のそばにいて学ぶものですが、遣わされる者でもあるのです。キリストの大使と呼んでもよいでしょうか？例えば、東京に米大使館がありますが、そこは治外法権になっていて、そこにアメリカ合衆国があるのと同じです。同じように、使徒がいるとうことは、そこにキリストの大使がいて、キリストの御国がそこにあるということです。教会であれば、それが宣教師とも呼ばれます。教会から遣わされて、他の文化、他の国、他の言語のところに遣わされます。けれども、私たちキリスト者は、本質的に宣教師であります。つまり、イエス様のところに集まって、イエス様から学んでいる弟子として、教会に私たちはいます。それから、自分の持ち場のところに遣わされます。精神的、物理的にはもちろん自分の家を中心なのですが、霊的には教会が中心です。そしてここから、一人一人の持ち場に遣わされるのです。ある教会は、出口のところに「全世界に福音を宣べ伝えなさい」という御言葉を掲げたり、「ここから遣わされます」という言葉を掲げたりしています。

そして、ここに出て来る使徒たちであります。まず初めと終わりに注目します。初めは、ペテロです。イエス様が後に、ペテロの言った信仰告白の上に、わたしの教会と建てると言われました。彼が教会の指導者として用いられます。イスカリオテのユダはイエス様を裏切りました。しかし、興味深いのは、イエス様を捕らえるのをユダが手助けをし、ペテロは裁かれているイエス様を、「知らない」と三度も否定しました。けれども、それだけの違いがあるというのは何か？イエス様の憐れみと恵みを受け入れているかどうか？の違いであります。失敗した時に、へりくだって悔い改めることができるかどうかの違いであります。頑張りの違いではないんですね。

その他は、四人が漁師であります。ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネは漁師です。つまり、普通の人たちであり、聖書的に知識のある宗教者ではありませんでした。さらに特徴的なのは、取税人マタイと熱心党员シモンがいることです。シモンの熱心党は、武力で神の国をもたらすと信じていました。武力でローマに戦い、それでメシアが来られてユダヤ人の神の国をもたらすと考えていました。民族主義であり、反ローマです。ところがマタイは、ローマの犬です。前回お話したように、ユダヤ人はローマに税を納めることが屈辱的に感じていましたが、それをユダヤ人が自ら買って出て、自分のふところに一部を入れながら徴税していたのです。罪人と同じ部類の中に入れられた人々です。ですから、もしイエス様が真ん中におられなければ、シモンは即座にマタイを刺し殺したことでしょう。つまり、あまりにも考え方が違う人々が集まっているということです。このように、普通の人々であり、また考え方も背景も、まるで違う人々が集まりました。これも、教会に集う弟子たちの姿であります。イエス様だけを見つめる、そうすればそこには平安があり、喜びがあり、そして互いに仕えます。

2A 宣教の性質 5-15

1B 先駆者 5-8

5 イエスはこの十二人を遣わす際、彼らにこう命じられた。「異邦人の道に行ってははいけません。」

また、サマリア人の町に入ってはいけません。6 むしろ、イスラエルの家の失われた羊たちのところに行きなさい。

ここからイエス様が十人に、具体的な指示を与られます。その中で、どうしても今の私たちには合わない指示も出てきます。それもそのはず、イエス様はこれを一時的なものとしてお語りになっていたからです。次に、出て行く時には何も持って行ってはならないことを言われますが、イエス様が捕えられる直前に、弟子たちに、「わたしがあなたがたを、財布も袋も履き物も満たせずに遣わしたとき、何か足りない物はありましたか。」と尋ねたら、弟子たちは、「いいえ、何もありませんでした。」と答えています(ルカ 22:35)。そして、「しかし今は、財布のあるものは財布を持ち、同じように袋も持ちなさい。剣のない物は上着を売って剣を買いなさい。(22:36)」と言われます。ですから、イエス様が捕えられる時は主がおられなくなるので、この具体的な指示を取りやめにしておられるのです。ですから一時的なものです。けれども、イエス様が甦られ、天に昇り、聖霊が与えられてからも、適用できることは一部にあり、また原則的なことは適用できます。

ここはその一つで、イエス様は昇天される前に、すべての国民を弟子としなさいと命じられました。そして使徒の働きでは、1章で、イエス様はエルサレムから、実にユダヤとサマリア、そして地の果てに至るまで、わたしの証人となると言われました。そして使徒の働きで、ステパノへの迫害によってサマリアにピリピが伝道し、そして異邦人への道は、ペテロがコルネリオと会い、またパウロがイエス様にとらえられてから始まりました。ですから、ここは一時的なものです。けれども、とても大切な指示です。神は、ユダヤ人から初めて、そして全ての人々に福音を伝えるご計画を立てておられたからです。「私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じる者すべての人に救いをもたらす神の力です。(ローマ 1:16)」ユダヤ人をはじめ、と言っています。それで、主が、失われているイスラエルの羊のところにもまず行きなさいと言われています。

2B 全権大使 7-17

7 行って、『天の御国が近づいた』と宣べ伝えなさい。8a 病人を癒やし、死人を生き返らせ、ツアラアトに冒された者をきよめ、悪霊どもを追い出さなさい。

ここがとても大事な言葉です。バプテスマのヨハネがこのことばを宣べ伝え、イエス様ご自身が、「悔い改めなさい。天の御国が近づいた」と宣べ伝えておられました。そして、イエス様が来られているので、心貧しい者には天の御国に入れるようになっています。弟子たちは、イエス様が様々な町を回っていく中で、前もって出て行ってイエス様を人々がお迎えする準備をするような働きです。

そして、天の御国の現われは、病人の癒し、死人の甦り、そしてらい病の清め、悪霊追い出しなどです。言葉だけでなく、その苦しみと縄目からの解放が、御霊の力の現われが宣教の内容でした。このように、神の光の国が、暗闇の国に攻め込んできて、その縄目にいる人々を解放して、神

のものとするというのが、神の行なわれようとしていることです。パウロに対して、イエス様がこう言われました。「それは彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、こうしてわたしを信じる信仰によって、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかるためである。(使徒 26:18)」蛇に惑わされたエバによって、アダムが罪を神に犯したために、人類は悪魔の支配、闇の中に入ってしまった。しかし、キリストが来られて、罪のために死に、甦られたことによって、それら囚われている人々が光の中に入れられるのです。

8b あなたがたはただで受けたのですから、ただで与えなさい。

ここは、主の教えられたことでとても大切なことです。主は、惜しみなくご自分を捧げ、その命を私たちのために注いでくださいました。したがって、私たちの働きも惜しみなく分け与えるということが基本になります。パウロが、エペソにおいて天幕作りをしながら福音を語っていましたが、「このように労苦して、弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が、『受けるよりも与えるほうが幸い。』と言われたみことばを、覚えているべきだということを、私はあらゆることを通してあなたがたに示してきたのです。(使徒 20:35)」自分の行なっている宣教の働きに、商売をしているかのごとく値段を付けるということは、あってはならないことを話しています。特に、癒しを行なえば、これまで医者に払っていた治療代が浮くわけで、それを癒してくれた人に払おうと人々が思ってもおかしくありません。けれども、自分が金銭のためではなく、天の御国のためであることを忘れることがあってはならない、受けるより、与えるほうが幸いなのだということを覚えさせます。

9 胴巻に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはいけません。10 袋も二枚目の下着も履き物も杖も持たずに、旅に出なさい。働く者が食べ物を得るのは当然だからです。

イエス様が一見矛盾したことを直後に言われていますね、ただで与えなさいと言われたのに、ここでは食べ物を得るのは当然だと言われています。けれどもここでは、イエス様のバランスを語っておられます。福音宣教において、金銭を愛することは害毒です。受けるのではなく、与えます。けれども同時に、その働きにおいて生活面における思い煩いが出てはいけないことを教えています。福音宣教の働きに専念できるようにさせないといけません。主が、備えてくださいます。そして霊的な事柄についての働き人は、物質的にその生活を支えられていくということは必要なことです。これは、自身、天幕作りで仕事をしながらも、イエス様が言われたように、「福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活の支えを得るように定められています。(2コリント 9:14)」と言っています。パウロは、教会の人々に負担をかけさせたくないという思いから、働いていました。しかし、もし教会が支えられるのであればそうしていくのが当然の権利だということです。

11 どの町や村に入っても、そこでだれがふさわしい人かをよく調べ、そこを立ち去るまで、その人のところにとどまりなさい。12 その家に入るときには、平安を祈るあいさつをしなさい。13 その家

がそれにふさわしければ、あなたがたの祈る平安がその家に来るようにし、ふさわしくなければ、その平安があなたがたのところに返って来るようにしなさい。

私たちの文化にはないですが、中東の人々はものすごいもてなしの文化があります。見知らぬ人であっても、その旅人をかならずもてなし、多くの場合、宿泊もさせてくれます。聖書に旅人をもてなす文化がありました、アブラハムが旅人だと思ってもてなしたら、御使いでした。それが背景になっていて、人々のもてなしの中で福音を語っていくための注意事項を教えてください。「だれがふさわしい人かをよく調べ」と言われていますが、よくもてなして下さる人であれば、大抵は、福音を聞いてくれるその心がある人でしょう。心を開いて、何かをして下さるということは、福音も聞いて下さる可能性があるのです。

そして平安、つまりシャロームという挨拶ですが、当時とても大切なものとされていました。本当にシャロームが、平和が繁栄があるようにと願っていました。なので、こう言うこともあり得たのです。「主の祝福があなたとあなたのご子息の上にありますように。」「ありがとう。」でも、道を歩いて行って、「おや、あの人はふさわしくなかった。あれは異邦人か何かだ」と思ったら、彼は戻って来て、「あの祝福は取り消しますね。」と言ったりします。これを私たちに当てはめるなら、私たちは決して自分たちの働きが無駄になることはないということです。つまり、人々が受け入れたら、そこに祝福があります。その人が祝福されます。けれども、拒んだとしても、その人が困ってしまうだけで、私たちにはその労苦に対する報いが天に積まれるからです。

14 だれかがあなたがたを受け入れず、あなたがたのことばに耳を傾けないなら、その家や町を出て行くときに足のちりを払い落としなさい。15 まことに、あなたがたに言います。さばきの日には、ソドムとゴモラの地のほうが、その町よりもさばきに耐えやすいのです。

実際に、パウロやバルナバが、福音を拒んだユダヤ人たちに足の塵を払い落しました。ピシディアのアンティオキアで、ユダヤ人たちの中に口汚く罵った人たちがいて、彼らを追い出してしまいましたが、「足のちりを払い落して、イコニオンに行った。(使徒 13:51)」とあります。そして、ソドムやゴモラの方が裁きに耐えやすいというのは、彼らが同じように福音をきちんと聞いたら、彼らでさえ悔い改めていたことだろう、ということです。わずかな知識しかなくとも、それに応答するということも多く起こるし、多くの知識が与えられているのに、それでも拒むということも多く起こります。

私たちはここから、「いろいろな事に対して、主が備えておられる」ということを知ります。主が必要を満たして下さるから、持ち物を少なくしてよい。また、主のことばを受け入れない者が出て来ても、それはその人が神に対して申し開きするのであって、自分が思い煩う必要はないということです。私たちはどうしても、肉の弱さで「なぜ、もっと上手に語るができなかったのか？」など、拒んだ人々のことを自分の責任であるかのように悩んでしまいます。けれども、それは全て主の

御手の中にあるということです。

3A 迫害 16-39

そして 16 節から、イエス様は福音宣教における、本格的な戦いについて語られます。御国が闇の中に入り込んでいるのですから、当然、敵が激しく抵抗します。それが、迫害という形で襲ってきます。私たちが、人の罪の深さを知り、賢く、また前もって心備えをしていなさいとイエス様は教えられます。

1B 人々への用心 16-23

16 いいですか。わたしは狼の中に羊を送り出すようにして、あなたがたを遣わします。ですから、蛇のように賢く、鳩のように素直でありなさい。

私たちは羊です。けれども、送り出される場所は狼がいるところです。主が羊飼いとて導き、守ってくださいますが、私たちがよくよく注意しなければいけないことを主は、教えておられます。当時の弟子たちは、既にパリサイ人たちから詰問を受けていました。なぜ、取税人や罪人と食事をしているのか？と非難されました。イエス様に直接話すのではなく、弟子たち、つまり弱いと見られるところに攻撃してくるのです。

イエス様は注意深くすること、思慮深くすることを、「蛇のように賢く」とまで言われています。獲物を狙うあの蛇の姿を思い出してください。気づかれぬように待ち伏せして、一気に狙います。それと同じように、物事がいったいどのように動いているのか、人の罪の奥深さ、また闇の力の大きさをしっかりとわきまえて、ただ気持ちだけ純粋でいればよいということではないのです。しかし同時に、「鳩のように素直でありなさい」とも言われます。蛇のように賢くなりなさいというのは、純粋さを放棄しなさいということではありません。むしろ、主に対して純粋でいることを守るために、思慮深くしているということです。

17 人々には用心しなさい。彼らはあなたがたを地方法院に引き渡し、会堂でむち打ちます。18 また、あなたがたは、わたしのために総督たちや王たちの前に連れて行かれ、彼らと異邦人に証しをすることになります。

「地方法院」というのは、それぞれの地方におけるシナゴークのことで、そこにユダヤ人が裁判を行ないます。そこに引き渡されます。また会堂でも鞭打たれます。これまでは、ユダヤ人の共同体の中にいた者たちが、イエスを信じたということで罰せられるのです。こうした同胞の民からの迫害があるだけでなく、異邦人の総督や王たちの前にも連れて行かれます。使徒の働きを読むと、ユダヤ人からの迫害と、またローマ総督や王の前での証言のどちらもが載っています。パウロが、カイサリアにいた時に、総督の前とヘロデ・アグリッパ二世の前で証言をしました。

ですから、「人々には用心しなさい」とイエス様は言われています。こんなことが、中東のある国で起こりました。アメリカからの教会が、聖書に深く関わる遺跡において盛大なコンサートを開きました。そしてその地域の現地教会も集まってきました。当局の人々が言いました、「すばらしいコンサートでした。関わった教会のリストをいただけますか？」と言って、それで手渡したのです。そう、当局はそのリストを使って、教会の一層摘発を行ないました。これが、用心深くありなさいということであり、蛇のように賢くなり、けれども、鳩のように素直でありなさいということです。

19 人々があなたがたを引き渡したとき、何をどう話そうかと心配しなくてもよいのです。話すことは、そのとき与えられるからです。20 話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあって話される、あなたがたの父の御霊です。

何でもない普通の人たちが、このような権力者の前で何を話せばよいか？心配すると思います。けれども、あなた方の天の父がくださる御霊が、その時に必要なことを教えてくださると約束しておられるのです。イエス様は、16 節以降は特に、ご自分が天の昇られた後、御霊をお注ぎになったとの彼らのことをお考えになって話しておられます。私たちにも、神の御霊が与えられています。けれども、御霊の満たしというのは自分のためにあるのではなく、主の御心を行なう時に、自分には全くその力がないことを知っている時に、与えられるものです。

21 兄弟は兄弟を、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に逆らって立ち、死に至らせます。22 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。

迫害が激しくなるということは、同時に、世の有様がますます暗くなっていることも反映しています。キリスト者への迫害は、その国や地域全体の闇を表しています。ここでは、家族という基本的な単位までが崩れてしまうことを話しておられます。例えば、迫害が激しいところでは、全体主義がはびこっており、家族でさえ警察に通報しなければ、家族全員が殺されてしまうことさえあります。それで通報します。また、そういった政治的な抑圧がなかったとしても、人々は家族の中でさえ、その自然の感情を失ってしまい殺し合いをしてしまうこともあります。世の終わりに近づけば、それは顕著です。そこで、私たちキリスト者に与えられている、大きな使命と特質をイエス様は言われています。「耐え忍ぶ」ことです。どんなことがあっても、それでもしっかりとふんばって、主にあって立っていることです。

23 一つの町で人々があなたがたを迫害するなら、別の町へ逃げなさい。まことに、あなたがたに言います。人の子が来るまで、あなたがたがイスラエルの町々を巡り終えることは、決してありません。

「人の子が来る」という言葉は、しばしば終わりの日にイエス様が再臨される時に使われる表現ですが、もちろん終わりの日のことではありません。イエス様が、弟子たちを遣わして、天の御国の福音を宣べ伝えさせて、それからご自身がその町々にやって来ることを意味しています。彼らが迫害を受けて他の町々に逃げたとしても、まだ他に行くべき町々は沢山残されている、ということ言われています。主は、私たちにも、まだまだ働くべきところはたくさんある、他にも主がお救いになりたいと願われている人々はたくさんいる、とされています。

2B 人々への恐れ 24-33

24 弟子は師以上の者ではなく、しもべも主人以上の者ではありません。25 弟子は師のように、しもべは主人のようになれば十分です。家の主人がベルゼブルと呼ばれるくらいなら、ましてその家の者たちは、どれほどひどい呼び方をされるでしょうか。

今、私たちが宣教の働きをする時に、本当に大事なエッセンスを次々に教えてくださっています。身軽でいなさいということでしょうか？ 宣教のために必要な備えにおいても、主が備えられるから身軽でいなさい。拒むものがあったとしても、祝福はあなたに留まっている。そして、迫害があっても、耐え忍びなさい主は必ず救ってくださる。それから、反対のために他の町に行っても、主がその後で来てくださる。主が、すべてを導き、守り、備え、助けてくださいます。

そして、主がここでお語りになっているのは、「主ご自身も、宣教に、云わば成功するわけではない」ということです。「弟子は師以上の者ではなく、しもべも主人以上の者ではありません。」とイエス様は言われます。私たちは、イエス様を伝えても受け入れてもらえなかったといって悩んでも、主ご自身も宣教を行なっても受け入れられなかったのです。弟子が主人以上に賢くなることはできません。そしてイエス様は、「ベルゼブルと呼ばれ」と言われますが、これの元々の意味は「ハエの家」です。ペリシテ人の異教の神のことを指していると思われませんが、ユダヤ人の間ではサタンと同等に使っていました。イエス様をサタン呼ばわりしていたのですから、その弟子に対してはもっとすごいでしょうか？ということでもあります。

26 ですから彼らを恐れてはいけません。おおわれているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずにすむものはないからです。27 わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。あなたがたが耳もとで聞いたことを、屋上で言い広めなさい。

迫害を受けている時に、それはしばしば隠れて行われています。ひどい仕打ちを受けても、それは人々の前には出てこず、その迫害者が公正に裁かれることはありません。つい二日前も、あるイスラム教国の中でのキリスト教会が、ものすごいリバイバルをしていると同時に、静かに知られないように当局によって捕まえられているという話を聞きました。そして、私たちのような自由な社会でも、キリスト者が最もつらいと感じているような内容は、表には出てきません。しかし、必ず明

るみが出る時がある、それが公正に報われる時がくると言います。黙示録を読めば、そうした不正に対して神は真実で正しい方だから、報いをされるということが書かれています。

そして、イエス様は、ある意味で暗やみで弟子たちに話しておられました。危険が多かったので、人里離れたところに行かれたりして、他の監視の目が届かないところで語っておられました。けれども、そういったことも大胆に屋上で言い広めなさいと言われました。当時の屋根は、平らなので、そこに上がって、大声を上げて多くの人に聞いてもらうことは可能です。事実、このように福音書を私たちは手にしています、これで世界中に言い広められています。

28 からだを殺しても、たましいを殺せない者たちを恐れてはいけません。むしろ、たましいもからだもゲヘナで滅ぼすことができる方を恐れなさい。

私たちはいつも、死んだ後のことも含めて、今を生きていく必要がありますね。永遠の命、永遠の報いがあることを忘れずにいること、実は今、生きているのは将来に比べると非常にわずかしいこと。だから、人を恐れて生きるということはいかに非生産的なことであり、その後の世界で火と硫黄で苦しめさせることができるお方のために生きるということです。

29 二羽の雀は一アサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でさえ、あなたがたの父の許しなしに地に落ちることはありません。30 あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。31 ですから恐れてはいけません。あなたがたは多くの雀よりも価値があるのです。

アサリオンは一デナリの16分の1の貨幣単位で、一デナリが一日の労賃です。ですから、二匹の雀が一アサリオンということは、本当に安いということ、価値がないということです。ところが、空の鳥は空で飛んでいるのです。主がそれを行われています。これだけ小さなことに神は関わっておられるんですね。また、髪の毛すらも全て数えておられます。それだけ、私たちは知られていて、養われているということです。

32 ですから、だれでも人々の前でわたしを認めるなら、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。33 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも、天におられるわたしの父の前で、その人を知らないと言います。

このように主が、あなたを見ておられるのだから、だから、あなたがたはこうなさいとイエス様は言われます。それは、「人の前でわたしを認める」ということです。これは、単に口でイエス様を信じているということに限りません。自分が、人々がいろいろいる中でも、尻込みせずに、恐れ退くことなく、キリストの前にいる生き方ができるかどうか？ということにも関わってきます。私たちは、独りで信仰を持つことは容易だと思います。心の中で思っているという信仰です。けれども、私た

ちは生きています。この社会に、そして教会もあります。その中に生きている時にも、思いの中で信じているイエス様に従って生きられるのか？ということです。

3B 仲間との確執 34-39

34 わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはいけません。わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました。35 わたしは、人をその父に、娘をその母に、嫁をその姑に逆らわせるために来たのです。36 そのようにして家の者たちがその人の敵となるのです。37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。

午前中にお話ししましたが、私たちがどうしても抱いてしまうのが、「イエス様を信じれば、良い、円満な生活が待っている」ということです。イエス様は平和の君だから、平和が広がっていくだろうということです。確かに、自分自身が引き起こしている争いの思いや、心の葛藤というものからは自由になるでしょう。そして、自分が赦せないと思っていた人と、和解することもできるでしょう。そうやって、平和を造ることができるです。イエス様も、平和を造る人は幸いです、と言われました。けれども、それでも心を頑なににして、むしろ反対してくるという現実もあるのだということです。それは、最も近い関係である家族の中で起こります。家族だからこそ、それが、剣が刺し通されたようになってしまいます。父と息子、娘と母、そして嫁と姑というように、特定の感情のつながりがある間で、そのもつれが起こるということです。

そしてその時に大事なものは、「どんなことがあっても、イエス様を第一にする」ということです。「愛する」という言葉が大事です。愛とは、意志を動かすことです。夫婦の間で、どんな魅力的な異性がいても、それでも夫婦の間の結びつきは何物にも代えられません。それと同じように、イエス様を第一とする。そこで、次の「十字架」の話になります。

38 自分の十字架を負ってわたしに従って来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。39 自分のいのちを得る者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを得るのです。

ここも午前中にお話ししました。イエス様を第一にするというところに、必要なのが「自己否定」です。イエス様のゆえに、自分のあり方、自分の思い、そういったものを敢えて強く退けることです。ローマの十字架は、まさにローマに対して屈服を意味していました。どんなにもがいても、ローマには対抗できないのだという見せしめでした。同じように、自分のあり方を捨てるということです。しかし、それは卑しい道ではありません。その正反対です、自分を救う道、自分の命を見出す道です。キリスト者は、自己否定するために自己否定するわけではありません。イエス様に対する熱烈な愛、イエス様に満たされて、この方で胸と心がいっぱいになることです。

4A 受け入れる者への報い 40-42

また思い出してください、弟子たちにイエス様が権威を授けたから、羊のような弱い存在であるにもかかわらず、力強い働きをすることができます。自分ではない、むしろ自分に死んでいくようになる時に、イエス様の命が働きます。そこで次は、その大使のような権限が与えられている中で、人々が受け入れる時に、実はイエス様も受け入れるようになるのだという約束です。

40 あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、わたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。41 預言者を預言者だからということで受け入れる人は、預言者の受ける報いを受けます。また、義人を義人だからということで受け入れる人は、義人の受ける報いを受けます。

私たちに必要なことは、「個人的に受けとめない」ということです。つまり、イエス様を代表しているのです、自分が反対を受ければ、それはイエス様に反対しているのであり、自分自身に対してではないのです。それと同じように、誰かが自分を受け入れるということは、その人自身がイエス様を受け入れているから、あるいはイエス様を受け入れるようになるからだという事です。そして、その人は預言者や義人が受ける報いを、共に受けるようになると言います。主が恵みによって、預言者を正しいとして、その義認の恵みをその人にも与えられるということです。

42 まことに、あなたがたに言います。わたしの弟子だからということで、この小さい者たちの一人に一杯の冷たい水でも飲ませる人は、決して報いを失うことはありません。」

主は、素晴らしい方です。弟子たちを小さな者たちと呼ばれています。そうです、弱く、すぐにつまずいてしまうような存在です。それにもかかわらず、イエス様の弟子だからということで、一杯の冷たい水、つまり疲れ切った体に、新鮮さを与えてくれる良い行いを見せてくれるのです。そうするという事は、必ずその人自身がイエス様ご自身を認めることができる、その人がイエス様の祝福にあずかるようになるということです。これは試されることでしょう、弟子たちは迫害もされます。窮地に陥ります。試練があります。しかし、その背後にイエス様がおられることを知っている人はなんと幸いなことでしょう。そして、だからこそ、その恵みにあずかりたいと思って、その人に関わるのです。私たちは待っているだけでなく、関わります。そうすれば、決して報いを失うことはありません。また、自分自身が弱くされていきます。でも、その時に誰かがイエス様の人だからということで、何かをしてくれたら、その人はすでにイエス様を受け入れる直前まで来ているかもしれないのです。